7 昔から今へと続くまちづくり

プロビデンス号
ブロートン船長は日本など北太平洋地域を探検。探検航海記（1804年発行）の中で、「エンデルモ（エトモ）・ハーバー」という天然の良港があることや、有珠山や駒ヶ岳などの火山に囲まれていることから「ボルカノ・ベイ」（噴火湾）と名付け、世界に紹介しました。

プロビデンス号

1. 室蘭の礎になった人々

現在では港をかこんでたくさんの工場が立ち並び、多くの人々が働き、生活している室蘭市は、どのように築かれてきたのでしょうか。

ともこさんたちは、その礎となった人々の苦労や努力を調べてみることにしました。

(1) 蝦夷地を守ろうとした武士たち

ロシアの「エカテリーナ号」が1792年に根室に、また、イギリスの探検船「プロビデンス号」が1796年に室蘭（絵鞆）に来航するなど、蝦夷地の近海には外国船がたびたびやってくるようになりました。

江戸幕府は蝦夷地がとられてしまうのではないかと考え、主に東北地方の武士たちに命じて、北の守りをかためることにしました。そこで、モロラン（今の崎守町）を警備と交通の大切な場所として、役人を置き、絵鞆にあった交易の場所を移し、登別方面への道を直したり、砲台を築いたりしてきました。この「モロラン場所」は多くの人々でにぎわいました。

モロラン会所と室蘭の地名のもととなった坂道(左側)

南部藩陣屋跡

また、「モロラン」という地名が今の「室蘭」へとつながることとなりました。

1856年には南部藩（岩手県）の武士たちがやってきてペケレオタ（今の陣屋町）に陣屋をつくり、三百余りの人たちが警護についていました。1868年、江戸幕府から明治政府へとかわる時に焼き払われてしまいましたが、今でもその跡は残っていて、当時の様子をうかがい知ることができます。

「モロラン」はアイヌ語で「ゆるやかに下る坂」「小さな下る路」の意味

「ペケレオタ」は「白い砂浜」の意味

(2) 仙台藩角田領からの移民

蝦夷地は明治政府になってから、北海道と呼ばれ、本格的に開拓がすすめられました。北海道を11の国と86の郡に分け、胆振国室蘭郡は仙台藩角田領（宮城県角田市）の武士たちが開拓にあたることとなりました。1870（明治3）年に崎守の浜に第1陣（44戸51人）が到着、今の石川町・幌萌町・本輪西町一帯を切り開きました。

開拓
山林を切り開いて、新しく農地や町をつくること。

日ざしをさえぎるほどの大木や大地をあつくおおったクマ笹になやまされながら、まず、手がけたのは自分たちの住む小屋づくりでした。移民たちの小屋の近

おがみ小屋

くにはクマやキツネなどがたくさんいたとのことです。

移民の小屋

木を切りたおす道具は、「のこぎり」と「おの」だけでしたので、たいへんな苦労の汗を流し、多くの時間がかかりました。また、切りたおした木は、動かせる大きさに切り、建物用の材木と冬のたきぎをのこして、焼きはらわれました。

次に、鍬であらおこしをして、ソバやジャガイモ・カボチャなどを植えつけました。開拓移民の生活は食べ物も貧しく、苦しい毎日でした。時には、天候不順でまったく作物が実らなかったり、バッタの大発生で被害を受けたりしたこともありました。あまりの苦しさに生まれ故郷に逃げ帰った人たちもいたそうです。

小屋のまわりのようす

どうにか生活できるようになると、無理をしてでも馬を買いもとめたそうです。馬を使うことで開こんの仕事や畑をおこす仕事がいくらか楽になり、はかどったそうです。また、鹿皮や材木、ホタテ、酒の商売や、製塩、製網、製鉄、養蚕など新たな産業を起こしたりすることも心がけました。その中で最も成功したのは製氷業で、今の港北町を流れる川の水を冬にこおらせて製氷した商品を「輪西氷」として関西方面にまで売り出したそうです。

馬を使っての開こん

(3) 屯田兵による開拓

広い北海道を警備し、国を守りながら、開拓をすすめるために屯田兵の制度がつくられ、本州や四国・九州などからたくさんの人たちがやってきました。

室蘭にも、1887(明治20)年と1889年にあわせて220戸、1100人くらいの屯田兵とその家族が移住してきました。

輪西屯田兵村
(今の中島町)
※1887年
鳥取県、兵庫県、愛媛県より
※1889年
石川県、福岡県、佐賀県より

今の宮の森町の高台(中嶋神社境内)に本部が建てられ、輪西屯田兵村がつくられました。

屯田兵は軍事訓練をしながら、家族とともに、野山を切り開いていきました。しかし、屯田兵村一帯は、湿地帯が多く、農業にはむいていないばかりか、濃霧、暴風、水害、塩害などにあい、収穫するものがほとんどないことも多く、貧しい生活でした。

とん田兵の火薬庫
(中島神社境内)

屯田兵村として彼らが苦闘の末に拓いた土地は、その後、製鉄所などの工場用地になったり、学校や住宅などがたち、今は室蘭を代表する市街地に発展しました。

開削
山野をきりひらいたり、けずったりして道路などを通すこと。

特徴のある地名
測量山～測量の基準となる点を定めた所
仏　坂～工事で多くのぎせい者をだした場所
ラッパ森～ラッパの合図で切り開いた森

(4)　札幌本道の開削と室蘭の開港

北海道の開拓をすすめていくには、本州から来た人々や、いろいろな品物を運ぶための道路が必要でした。

そこで、1872（明治5）年、函館と札幌を結ぶ馬車道路（札幌本道）を作ることを計画しました。この道路は、函館から森に出て、そこから船で内浦湾をわたり室蘭港から再び道路をつくり、千歳を通って札幌に通じるものでした。

この工事には、本州や九州から作業員や大工など約5000人もの人たちが集められ、たいへんな早さで作業がすすめられました。

テント村に寝起きしながら大木を切りたおしたり、山を削ったり土砂や石を運ぶ工事が続けられました。少しでも勝手に休んだりなまけたりすると組頭からぼうでなぐられるなど、きびしい作業で、病気にかかる人だけでなく、事故によるけが人や、死ぬ人もたくさん出ました。

道路は、わずか1年半たらずで完成しましたが、この工事で苦労した人たち、なくなった人たちのぎせいの上に札幌本道（今の国道36号線）はつくられたのです。

仏坂の切り通しを見下ろす高台に立っている慰霊碑は、この工事でなくなった人たちと日鋼のうめたて工事でなくなった人たちの魂を合わせてまつってあるものです。

仏坂の慰霊碑

札幌本道の建設にともなって1872（明治5）年、海関所とともに室蘭港が誕生しました。トキカラモイ（現在の海岸町）に桟橋が設けられ、森と室蘭の間に船が行き来することとなりました。

道路や桟橋ができる前のトキカラモイには、アイヌの人たちの家がいくつかあるだけでしたが、道路ができてからは「新室蘭」と呼ばれ、和人の移住者が増え、荷揚げ作業や建設の音が響き、商店がのきをならべるようになりました。また、学校・病院もつくられ、町が形づくられました。そして、室蘭の中心地が崎守町から海岸町方面へと大きくうつり変ることとなりました。

札幌本道（函館～森～室蘭～札幌）のルート図

テント村

トキカラモイ桟橋

札幌本道の開削工事

明治38年頃の札幌通り（今の海岸町）

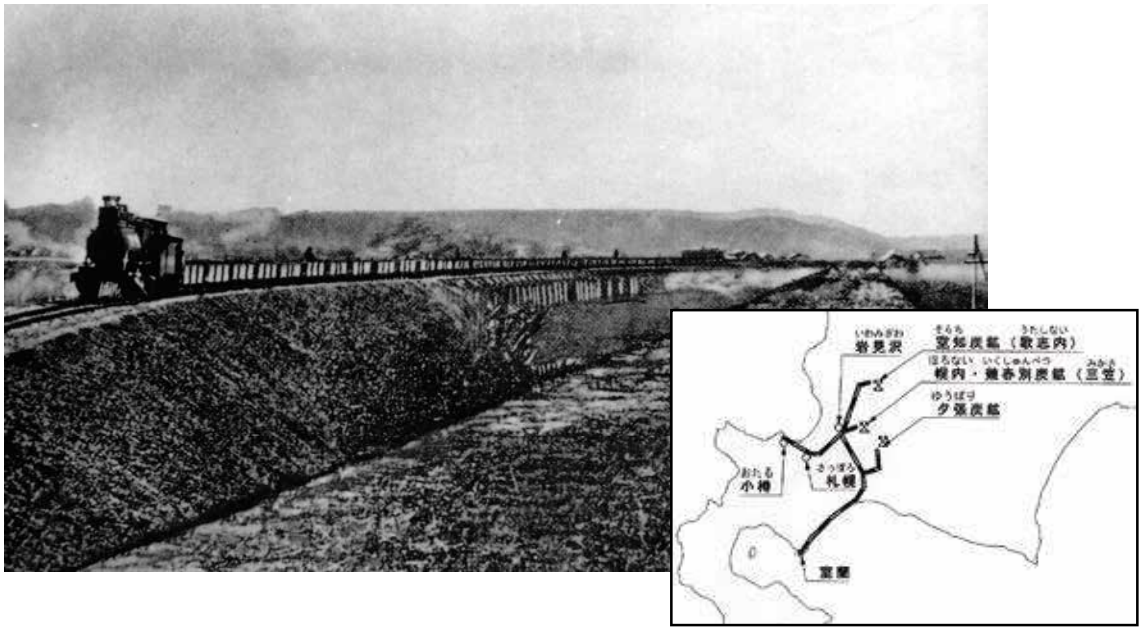
(5) 鉄道の開通と石炭荷役

札幌本道が完成し室蘭港が開港したものの、北海道の玄関口としてにぎわう函館港や石炭の積み出し港となった小樽港に比べると、室蘭港はあまり活用されていませんでした。

しかし、1892(明治25)年に岩見沢と室蘭が北海道炭鑛鉄道会社（北炭）の鉄道で結ばれました。これにより、空知や夕張で産出された石炭が運ばれてきて、重要な石炭積み出し港となりました。それは、現在の「室蘭」を形づくるきっかけとなりました。

イトッケレップ桟橋

はじめの頃は、イトッケレップ（今の御崎町）に石炭積み出し用の桟橋を設けました。桟橋と船の間にわたり板をかけ、てんびん棒の前後の竹かご(パイスケ)に



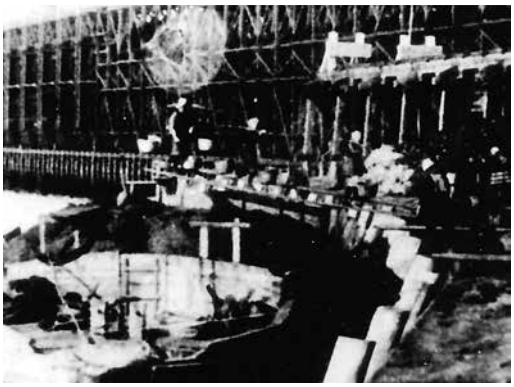
石炭列車の写真と当時の北海道の鉄道

石炭を入れ、肩にかついで板を渡って船の中に石炭を放り込みました。

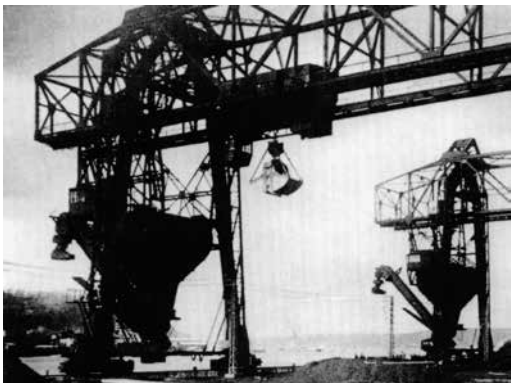
また、「ハシケ」に石炭を積んで沖で待つ船に運びました。さらに、「カマス(わらあみ袋)」に入れ、かついで船に運びました。このようなきびしい仕事につき、室蘭港の石炭積み出し港としての発展を支えてきたのが、「沖仲仕(おきなかし)」とよばれた労働者たちでした。

1906(明治39)年には、北炭の鉄道は国に買い取られることになりましたが、その後、鉄道は室蘭方面に延長され、今の入江(いりえ)運動公園や築地(つきぢ)町には、石炭の積み出しに関わるさまざまな設備(せつび)が整えられていきました。

パイスケをかつぐ「沖仲仕」の人形と、当時の石炭の積み出しのようす



石炭高架桟橋(こうかさんばし)(明治44年完成)



トランスポーター(昭和初期完成)

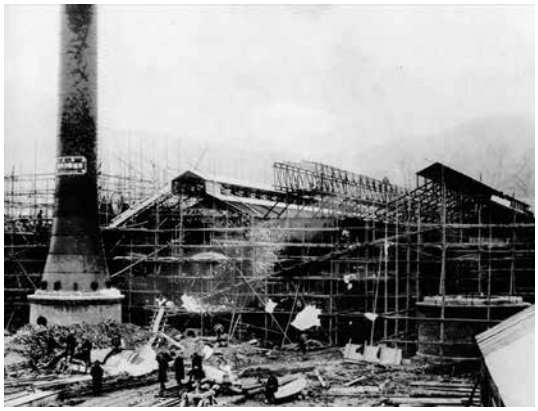
(6) 鉄の町『室蘭』の誕生

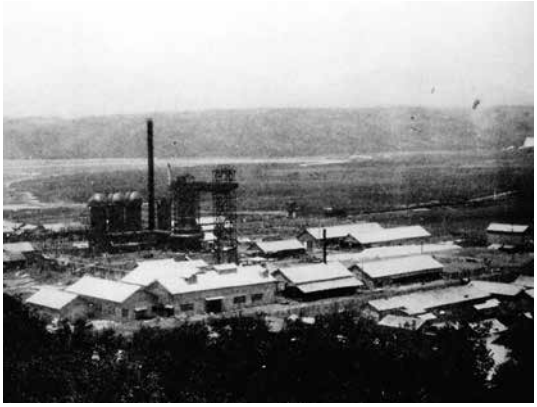
当時の日本の政府は、外国との戦争にそなえて、兵器や必要な鉄製品などを自分たちの国で造れるようになりたいと考えていました。

そんな時、国に鉄道を売った北炭は、その時の資金をもとにして、1907（明治40）年、夕張や空知から集まってくる石炭と噴火湾沿岸で産出する砂鉄を使って、戦争に使う武器や大砲の原料となる鉄と鋼をつくる工場の建設を始めました。

室蘭には広い土地が少ないので、山を削った土砂で海を埋め立てたところや、水はけの悪かった平地に工場が建てられました。これが、今の日鋼や新日鉄のはじまりです。

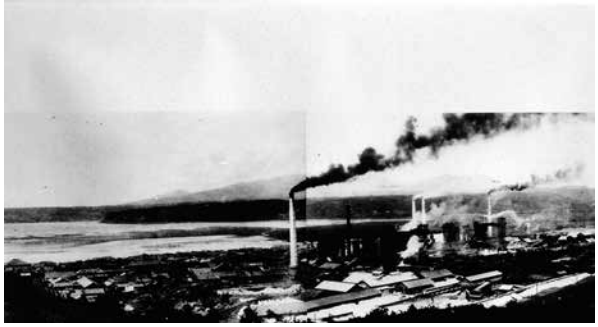
たびかさなる戦争で忙しくなった工場には、働く人がおおぜい集まるようになりました。社宅がたちならび、そのまわりには商店街もできて、母恋や御前水、輪西など、新しいまちができました。





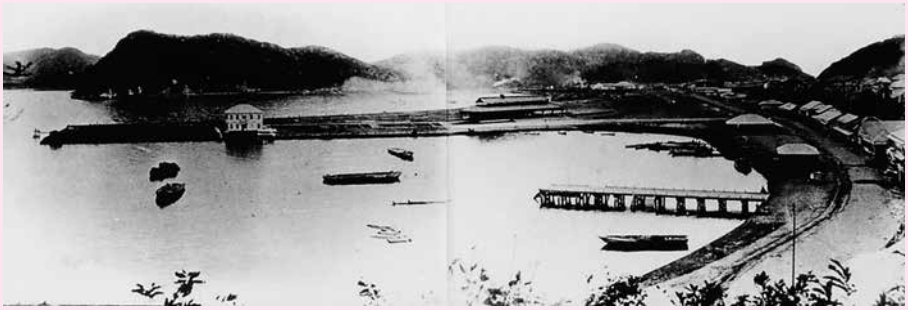
日鋼室蘭製作所の建設と（左）と創業当時の輪西製作所（右）

室蘭の人口は、工場の建設前に約１万人ほどでしたが、工場の建設がはじまり、鉄や武器の生産が行われるようになると、数年で３万人を越えました。



コラム

まちが発展する様子を、３枚の写真からとらえてみよう！



2　よみがえる工業

戦争で多くの工場がこわされ、生活に必要な物が不足していました。なべ、かま、台所用品など、なかなか手に入りませんでした。

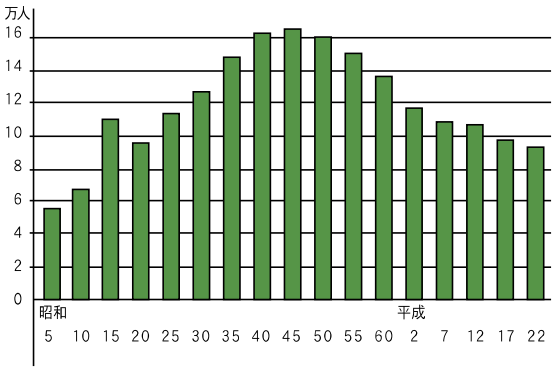
そこで、日鋼では、生活に使われる物を生産し始めました。函館どつくや楢崎（ならさき）造船では、漁船などの船をつくる注文が多くなりました。船や機械、生活に必要な物を作るためには、鉄が使われます。

富士鉄（今の新日鉄）では、大量に鉄を生産することになり、工場の仕事もだんだん増えました。働く人も一時期は1万人以上にもなりました。

工場の煙突（えんとつ）から昼も夜ももくもくと煙（けむり）がはきだされるほど仕事が多くなり、商店街も活気づいてきて、室蘭市の人口も、急げきにふえました。

まちのにぎわいのようす

昭和40年頃までふえ続けているね。



室蘭市の人口の移り変わり(国勢調査人口より)

出社風景

たくさんの人が、工場の仕事に向かっているよ。

しかし、工場の近くの輪西や東町では、煙や粉じんが入らないように、窓にビニールをはってふせぐ家もあり、老人や子どもの中には、ぜん息で苦しむ人も出てきました。

このころ全国的にも公害（こうがい）が社会問題になり、公害をなくす運動が高まり、室蘭でもこうした運動が起きました。

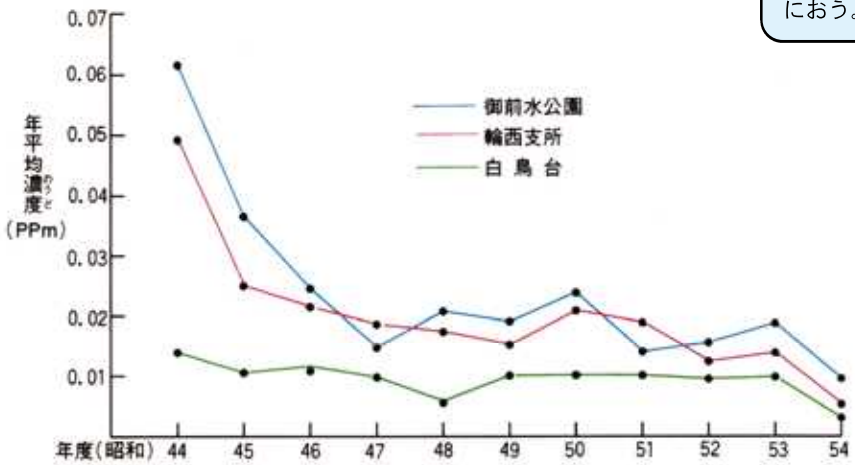
そこで、市は工場と、公害防止協定（こうがいぼうしきょうてい）を結びました。工場でも煙を出さないせつびを整えたりして、室蘭の空はしだいにきれいになっていきました。

生産がさかんなころの工場のようす

室蘭市は、自然が豊かな町だと思っていたけど、公害などの問題もあったのね。

環境を大切にしていくことは、自分たちの健康や、地球を守ることにつながっていく大切な課題だね！

亜硫酸ガス（ありゅうさん）
硫黄（いおう）をもやす時に出る無色の気体で鼻をさすようにおう。



当時の空気の汚れ（亜硫酸ガス）の折れ線グラフ

3　これからの室蘭

(1)　変わる室蘭

室蘭市は、工業都市としてさかえ、1969(昭和44)年には人口が18万人(住民基本台帳人口より)になったことがあります。

そのころの富士鉄(今の日本製鉄)の溶こう炉は、４基とも使用されていましたが、平成3年には1基だけになりました。

働く人の中には、他の都市へうつって行く人もおり、今では室蘭市の人口はおよそ８万人になってしまいました。

香川工業団地

だんだんと人口が減り、室蘭市はしだいにさびしくなってきました。そこで、北海道や室蘭市では、活気のある町にするため、さまざまな努力をしています。

昭和62年には、新しい工場用地をつくり、工場がきてくれるようにはたらきかけました。香川工業団地には、こうして進出した工場がたくさんあり、金型や光学レンズの研磨など最新技術で製品をつくっています。

姉妹都市の締結

また、1998(平成10)年には白鳥大橋が完成し、道央自動車道とも結ばれました。交通がいちだんと便利になり、港を一周できるサークル都市としての新しい室蘭の姿ができあがりました。

さらに、静岡県の静岡市(旧清水市)、新潟県の上越市、アメリカのノックスビル市の姉妹都市に加え、中国の日照市と友好都市、沖縄県の宮古島(旧平良市)と交流都

市の関係を持ち、フェリーで結ばれた岩手県の宮古市とも、さまざまな交流事業が進められています。

私たちの室蘭市は、これまでずっと「ものづくりのまち」として発展してきましたが、これからは自然環境を大切に守って生産を進める人間にやさしい産業都市をめざしています。

この章では、室蘭の歴史について学んできましたが、21世紀に生きる私たちにとって、これまでのふるさとの歩みをふりかえってみることは、とても大切なことです。いま住んでいる室蘭を築いた人々の苦労だけでなく何を求め、何を希望し何を願ってきたか、人々の夢を知ることができるからです。

私たちもまた、そうした先人の夢を引きつぎ、もっともっとみんなが共に幸せになれるよう、自分たちの手で、私たちの室蘭をつくっていきたいと思います。

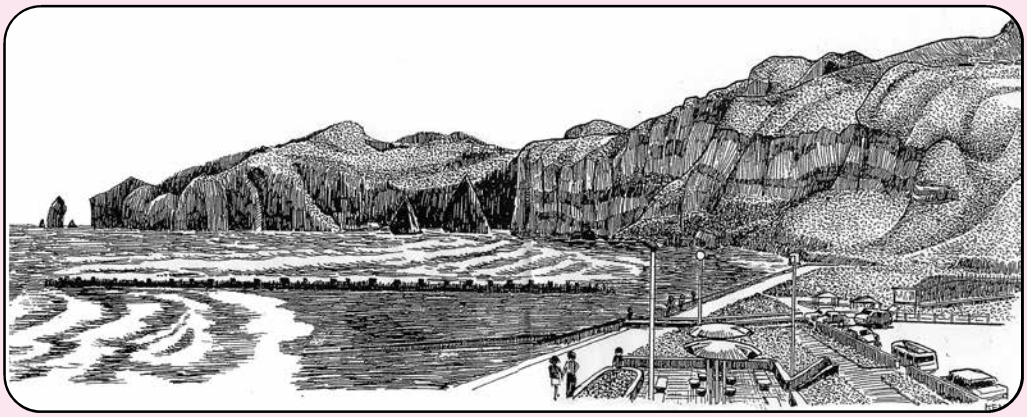
郷土への思いがつまったいろいろなパンフレット

(2) まちづくりは続く

室蘭市は、１８７２（明治５）年の開港以来、大正１１年には札幌市などとともに道内初の市となり、２０１２（平成２４）年に、開港１４０年、市制施行９０年を数えました。これまで、港を中心に工業都市としてさかえてきた室蘭市は、今後どのような姿に変わっていくのでしょうか。豊かで安心してくらせるまちづくりをめざし、さまざまな努力をしている人にお話を聞きました。

工業都市室蘭は、実は豊かな自然が残されたまちです。周りを海に囲まれた室蘭市は、絵鞆からイタンキにかけて高さ１００m級の断崖が十数キロ続き、手つかずの自然海岸があります。地球岬一帯の海岸は、渡り鳥の中継地で、絶滅危惧種に指定されている「ハヤブサ」の国内有数の繁殖地になっています。また、イタンキ浜には、全国に数少ない「鳴り砂」があります。鳴り砂は、砂地を歩いたときに「キュッキュッ」と音を出す砂のことです。１００年ほど前までは、全国各地で見られましたが、海岸の埋め立てなどで姿を消したり、ゴミなどでよごされて音を出さなくなりました。鳴り砂は、自然そのものが残っている所にしかなく、環境のバロメーターといわれています。近くに大きな工場があり、たくさんの人が住むまちのすぐ近くに自然いっぱいで環境にやさしい鳴り砂があるのは、室蘭市だけなのです。ですから、わたしたちは、鳴り砂やハヤブサなどに代表される自然豊かなふるさとを全国に紹介し、工場だけではない魅力ある室蘭の姿を見に来てもらいたいと考えています。そのためにも、イタンキ浜の環境を守り、未来に美しい海岸を残せるようがんばっています。

（鳴り砂を守っている菊地さん）



（ペン画、故 寺地憲一）

室蘭を代表する食べ物の一つとして、「やきとり」が全国的に注目を集めています。材料に豚肉と玉ネギを使い、洋がらしをつけて食べるのが室蘭独特のスタイルです。そのスタイルと味は、長年市民に親しまれてきました。そこに注目した人たちが、「やきとり」を観光資源としていかし、まちおこしに積極的に役立てているのです。

これまで、イベントに出店（スワンフェスタのやきとり横丁）し、やきとりのロゴマークややきとりソングをつくり、学校給食に「やきとり丼」を登場させるなど、市民や役所がそれぞれ知恵を出し合ってもり上げています。また、郵便局でも、「ふるさと小包」（やきとりゆうパック）を発売し日本全国に発送しています。そして、室蘭と関係のある有名人に宣伝してもらおうと、スピードスケートで活躍した堀井学さんなどを「やきとり大使」に任命しています。

これからの室蘭市は、「港と工業のまち」とともに「やきとりのまち」として、全国的に有名になるかもしれません。

（室蘭の焼鳥を応援している中澤さん）

室蘭市は、1872（明治５）年に室蘭海関所がつくられてからこれまでの発展を支えてきたのは、天然の良港である室蘭港と鉄鋼業をはじめとした100年以上続く「ものづくりの技術」です。

室蘭の人口は、現在およそ９万人となり、まちの勢いが以前よりなくなったといわれています。しかし、これまでつくりあげてきた高度な技術や人材、そして、室蘭工業大学や港があることをいかし、ＰＣＢなどの有害物質処理や、廃プラスチックなどのリサイクル、風力発電などの環境産業への事業展開が行われるなど、まちの元気回復に取り組んでいます。

また、室蘭市は面積でいうと道内179市町村の中では10番目に小さなまちですが、周りには皆さんも行ったことがある登別温泉や洞爺湖温泉、農水産物の生産地である伊達や豊浦、壮瞥があり、室蘭周辺のこれらのまちからも、室蘭へ仕事や学校への通学、買い物や病院の通院などで多くの人たちが行き来し、市町の枠をこえたつながりがあります。

これからの「まちづくり」では、室蘭市のことだけを考えるのではなく、周りの市町と協力し、お互いにまちの良さを共有し、特性を活かしながら、住みよい地域づくりをめざしていきます。

（市役所の木村さん）